

米国リンゴ協会の見通しは好転の兆し

Good Fruit Grower 2025年10月9日

米国リンゴ協会の講演者らが生産量及び好転の兆しについて語る

8月に開催された米国リンゴ協会(USApple)の見通し会議で、ウェスト・マシソン氏が登壇する前の聴衆による投票では、この業界の現在の経済的停滞が回復するまでに4年かかると予想されていた。

ワシントン州に拠点を置くステミルトグロワーズ社のCEOであるマシソン氏は、他の講演者と共に米国の膨大なリンゴ生産量の原因と影響について語る中で、「もう少し早く回復すると思う」と述べた。

マシソン氏は、同協会の年次会議に18カ国から集まった370名の参加者に対し、業界が供給過剰に直面する中で、リンゴの供給曲線は2027年に改善し始めると語った。

ワシントン州の生産者達は、今年の収穫量を1億4,200万箱(40ポンド/箱)と見積もっており、これは2014年の最高記録に並ぶものである。マシソン氏は、それ以降状況は変化しているという。品種は輸出市場で好まれるものから、国内の消費者向けの高価格品種へと移行している。米ドルは、輸出先国が1箱当たり25ドル以上を支払えないほど高くなっている。生産コストの上昇により、損益分岐点の価格は2倍になった。

これらの状況を踏まえ、供給量は減少し始めると同氏は予測した。

その根拠として、マシソン氏はワシントン州果樹協会が定期的に作成している5カ年生産量予測を挙げた。この予測は非公開だが、予想生産量は徐々に減少しているという。同氏はこれを「励みになる」と表現した。

一方で、生産を支えてきた要因は終焉を迎えつつある。銀行は融資を打ち切っており、5カ年平均に基づく農業経営体単位の収入保険が多くの場合この5年間支払われてきた。春からは大規模な果樹園の撤去が始まると同氏は見ている。

同氏は、全国的だが任意参加の健康促進キャンペーン「もっとリンゴを食べよう」等の共同販促活動を支持しているが、マーケティングと価格設定だけでは状況を立て直せないと述べた。

マシソン氏は、ワシントン州にとって理想的な出荷量は1億2,500万箱である言い、北米市場が1億1,700万箱を吸収し、残り約800万箱が海外に輸出されるとした。つまり、生産者は果実の12%を樹上に残すか、箱詰めしないでおく必要がある。果樹園の面積では、12%は1万7千〜2万エーカーに相当する。

この出荷量の調整により、価格は改善すると同氏は予測している。

同氏は「夜が明ければ朝が来る」(今は厳しいが必ず良くなる)と語った。

「洪水」に直面して

退職した業界幹部のウェルカム・ザウアー氏は、ワシントン州のリンゴ供給問題を、流れ込む水が増えているのに、固定されたパイプを通してしか排水されないために氾濫している池に例えた。

同氏は特にガラとふじの需要の変化を指摘した。これらの品種は20年かそこらの間、新しい人気品種として消費者に好まれ、生産者に利益をもたらし、貯蔵技術の向上と輸出市場での好評に支えられてきた。これらのリンゴ自体の良さは変わらないにもかかわらず、2016年頃から新しい品種や他の果実に押されて需要が減少し始めた。

同氏は「これは悪いニュースか」と問い、「私は違うと思う。これは業界にとって通常の状態だ」と述べた。

かつてはジョナサン、ワインサップ等の品種が同じ道をたどり、レッドデリシャスやゴールデンデリシャスに取って代わられた。現在の問題は、かつて新しかったガラとふじが、現在の新しいリンゴに場所を譲るほどには生産量が減少していないことである。ガラは依然として、州内で飛び抜けて最も生産量の多いリンゴである。

カテゴリーパートナーズ社(青果物専門のデータ分析会社)のCEOであるトム・バーンズ氏は、リンゴ部門

は全体的に依然として非弾力的であり、品種や小売業者によって異なるものの、例えば価格を10%下げても消費量は5%しか増えないと述べた。

消費者は他の品種よりもハニークリスピの値引きに最も反応するが、同氏はハニークリスピを1.99ドルに値下げするのは一時的な販促時のみにすべきであると主張する。消費者は他のリンゴをハニークリスピやガラ、ふじと比較する。店がそれらを1ポンド当たり99セントで販売すれば、消費者はクラブ品種に2.99ドルを支払うことをためらうであろう。しかし、ハニークリスピの価格が高ければ、消費者はより高価な品種に切り替える可能性がある。

同氏は「価格を99セントに下げたからといって、大量のリンゴが売れる訳ではない」と述べた。

米国リンゴ協会の分析担当副会長であるクリス・ガーラック氏によると、ハニークリスピの生産者収益は、貯蔵量が2千万～2,500万ブッシェルに達すると変動する傾向がある。11月の貯蔵量がその水準に達すると、収益は40ポンド箱当たり50ドルを下回り始める。これは、ワシントン州立大学の農業経済学者であるカーリーナ・ギャルド氏が米国リンゴ協会に対して述べたところによれば、総生産費を下回る価格である。

ワシントン州及び米国全体で、今年もハニークリスピの豊作が予想されている。ガーラック氏は「これは長期的に持続可能な環境ではない」と述べた。

米国のリンゴは豊作、他の国は不作の予想

米国のリンゴ生産者らは8月中旬に、2025年産の収穫量を2億7,850万ブッシェル(42ポンド/ブッシェル)と予想していた。この数字には生鮮市場向けと加工市場向けのリンゴが含まれており、予測どおりであれば昨年をわずかに上回ることとなる。

このリンゴの量は非常に多く、シカゴで開催された米国リンゴ協会の見通し会議において生産者と出荷業者が推計値をまとめる際、彼らはすべての作物を収穫しないことについて議論した。

米国リンゴ協会の分析担当副会長であるクリス・ガーラック氏は今年の数字について述べる中で、「恐らく、果樹から実際にすべてを収穫すべきではなく、すべてを箱詰めすべきではない」と語った。

生産量の見通しは、首位のワシントン州が1億8千万ブッシェルで、次いでニューヨーク州が3,050万ブッシェル、ミシガン州が3千万ブッシェル、ペンシルベニア州が1,050万ブッシェル、オレゴン州が390万ブッシェル、カリフォルニア州が380万ブッシェルと続く。

世界の他の国々については、中国が依然として他国をバケツの中の一滴に見せるほどの圧倒的な規模である。世界リンゴ・ナシ協会(WAPA)によると、今年の中国の生産量は5%減の約20億ブッシェルと推定されており、これは米国の10倍以上(原文のまま)に相当する。晩生のふじが中国の収穫量の70%を占めている。同国は品質と価格の向上も進めており、東南アジアの輸出市場において米国の手強い競争相手となっている。

WAPAによると、欧州諸国全体の生産量は昨年とほぼ同水準の5億6千万ブッシェルと見込まれる。首位のポーランドが約1億7,300万ブッシェルであり、イタリア、フランス、ドイツ、スペインがそれに続く。

トルコの輸出量は過去10年間で急速に増加してきたが、4月の厳しい霜の影響により今年の生産量は2億3,200万ブッシェルから1億4,200万ブッシェルへと急減する見込みである。ガーラック氏は、これにより、特にトルコの主要市場の1つであるインドにおいて、米国からの輸出に市場機会が生まれる可能性があるとして、「彼らの出荷量が底をつき、我々が彼らの市場に参入できるようになるかも知れない」と語った。

執筆者: R. コートニー